

ああ幸いだ、悲しむ人々は。その人たちは 慰められるからである。(マタイ福音書5の3~4)

Blessed are those who mourn: they shall be comforted.

この言葉は、新約聖書のなかでもとくによく知られた言葉のひとつである。

しかし、悲しむ人々が幸いだ、というようなことは、一般的にはまず考えられないことである。ここで用いられている「悲しむ」という原語は、一時的に人から誤解されて悲しいとかいった意味でなく、旧約聖書のギリシヤ語訳ではその多くが、愛する者の死をいたみ悲しむといった箇所が使われているし、新約聖書でも死などに関する深い悲しみをあらわすときに用いられている。

例えば、ヤコブはその愛する子のヨセフが死んだとの知らせを受けて嘆き悲しんだ。(創世記37の34) あるいは、イエスの十字架の処刑を人々が嘆き悲しんだ…(マルコ16の10)のような箇所である。英訳の、mourn という語も、やはり死や特別な不幸に関する悲しみを表す語である。

このことからわかるように、主イエスがここで言われたのは、私たちの魂が、愛する者の死のような、取り返しのつかないような事態に直面して経験する深い悲しみにある人たちに対して、「ああ、幸いだ」(*)と言われたのである。

(*) 原文は、makarioi (幸いだ) hoi (冠詞) penthountes (悲しむという動詞の現在分詞形の複数形) —マカリオイ ホイ ペンスーンテス で、英訳文は、原文の感じを日本語訳よりもよくあらわしている。まず、幸いだ! という言葉が、間投詞のように冒頭で言われているのである。

それは、とても意外なことであり、このような言葉を聞いた人たちも、とても驚いたことであろう。なぜ、幸いなのか、それは、そのような深い悲しみのときにこそ、神との真実な結びつきが与えられ、その神から、慰められ、励まされるからである。

ここで、「慰められる」と訳されている原語は、「励まされる」とも訳される言葉で、じっさいにそのように訳されている箇所もいろいろあり(*)、日本語の慰める、といった柔らかな語感にとどまるのではなく、積極的に勇気づける、励ますといったニュアンスを持った言葉である。

(*) あなた方はこれらの言葉によって互いに励ましあいなさい。(Iテサロニケ4の18) なお、この原語は、パラカレオー。これは英語訳では、しばしば encouragement (励ます、勇気づける) と訳されている。慰めるという英訳は、comfort という英語が多く用いられるが、この語も、もともとは、con +fortis (強い、力あるを意味するラテン語) であり、力付けるという意味を持っている。

このようなことからわかるのは、このキリストの言葉は、愛する者の死とか取り返しのつかないような打撃を受けた悲しみにある人たちに、そのことにもうち勝つあらたな力を与えられる道を指し示したものである。

そのような特別な悲しみがなぜ自分だけに起こったのか、その理由については自然災害のようなことも含めて、よく分からないことがある。しかし、そうした疑問のただなかではっきり言えることがある。それを主イエスが言われたのである。その悲しみのなかから、神を仰ぐ、愛と真実の神、キリストを仰ぐときには、必ず傷ついた魂、絶望的になった魂に新たな力が与えられ、励まし、あるいは慰めが与えられる。その悲しみがなかったら与えられなかった神との深い交わりが生まれるゆえに、幸いだ! と言われたのであった。ここにおいて、この世のいかなる悲しみにあっても、この単純なキリストのことを信じることによってうち勝つという道が開けているのがわかる。それはだれでも試してみることができる。能力や、過去の罪、あるいは年齢などに関わりなく与えられる究極的な道、万人に与えられる悲しみのなかから新たな力を与えられる道なのである。



これは、フウロソウの仲間で、薬草として知られるゲンノショウコもこの仲間です。

淡いピンクの花びらの先端が三つに分かれた珍しいもので、北海道や本州中部以北に見られます。

伊吹山に見られるものは、日本での西南限となっていてとされています。草丈はこれは30～50センチ程度です。

伊吹山には、このほかにも、ハクサンフウロや、ヒメフウロ、ミツバフウロなどいろいろあり、四国の剣山にもシコクフウロ というのがあります。

これらのフウロソウの仲間のうち、道端にも、よく見られるものは、外来種のアメリカフウロソウです。これは踏みつけられてもそれに耐えて生きる強さを持っています。それに対して、この写真にあげたものなどは、寒い地域の山でないと見られないのです。

このようなさまざまの変化形は、何のためにあるのか、不思議に思われます。この花のように切れ込まずに丸い花びらのものが同時に同じ地域に見られるのですから、花びらが切れ込む必要は、この植物が生きていくうえでは何も必要がないからです。それ自身が生きていく上で必要がないにもかかわらず、こうした花びらの形や、色、模様、あるいは、茎に見られる細毛の有無など、いろいろと変化があり、葉のかたちもだいたいよくていますが、少しずつ異なっています。そして、薬用となるのは、この仲間のうち、ゲンノショウコのみです。

神の創造物には実にさまざまの変化があり、人間においても、さまざまの外見や能力、身体的な特質が異なるのですが、そうしたさまざまの変化ある姿が全体として、創造主の英知と力を表しているのを感じます。

春になると、いっせいに木々は芽吹き、草も成長して葉を広げ、花を咲かせますが、それぞれにみな形や大きさ、色合いなども違ってきます。一本の樹木だけとっても、そこに見られる葉は一つ一つ形や大きさも異なるものです。ひとつとして全く同じものはない、それが神の創造された世界の状態です。

このように、万物の創造の神は、無限の多様性を生み出すお方であり、それゆえに、人間世界においても、いかに人間的な考えでは絶望であり、行き詰まっても、神はまったく新たな道を開くことができるのであり、それゆえに、神は、「希望の源である神」（ローマの信徒への手紙15の13）と言われているのです。（写真、文ともT. YOSHIMURA）